昭和51年5月9日第三種郵便物認可　昭和57年3月1日発行（毎月一回発行）

ISSN 0285-1873

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 124

1982 MAR.

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN——HAJ

1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌ　ン（7,135m）

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行なっており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実践している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- 1977年　タルコット（6,099m）（JACに協賛して行なった）
- 1978年　ヌン（7,135m）　4名登頂
  トリスルI峰（7,120m）6名登頂
  II峰（6,690m）　7名登頂
- 1979年　キャシードラル（6,400m）6,000mまで
- 1980年　ケダルナート・ドーム（6,831m）19名登頂
- 1981年　ナンダ・カート（6,611m）事故のため断念
- 1982年　クン（7,077m）現在準備活動中

実施要項

目　的　①ヌン（7,135m）登頂
②高所登山の基礎修得

時　期　1983年7月末～8月末（35日間）

負担金　70万円（航空運賃の変動等により変ることもあります）

定　員　20名
インストラクター4名（医師含む）

申込み　1982年6月末までに下記宛に申込むこと（資料を送ります）
〒160 東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506号日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申し込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、㈱西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真　ナンダ・カートの捜索活動でゾンデ棒を振る背後にピンダリ河の盟主・ナンダ・コット（6,881m、右）がピラミダルな山容で聳えていた。（尾形好雄）

ヒマラヤ No.124

1．ヒマラヤ放談 ―― 遠藤京子
4．ヒマラヤニュース〈地域ニュース・トピックス・インフォメーション〉
6．インド・ヒマラヤ1980年リスト（その2……インド隊）　資料IMF提供
12．ガッシャーブルムI峰登頂 ―― 長野県山岳協会隊
17．連載　未踏への誘い（3） ―― 杉本忠男
ヒマラヤ閑話 ㊾ ―― 水野勉
ヒマラヤの報告書紹介 ⑩
24．事務局日誌・寸感

連載 《31》

ヒマラヤ放談

遠藤(旧姓佐藤)京子――1968年、シルクロードの山々を延々と登り歩いたあげくにイストル・オ・ナールのロックピナクル(7200m)に登頂。一躍話題をさらった「同人ユングフラウ」の大黒柱である。以後もマナスル、ボゴダ、そして今度はさらに未知なる山を求めてチャンラをめざす。さらにまだその先に遠大なプランもあるという。今日は、このすご～いお姉さんにお話を伺ってみた。

遠藤 京子

●チャンラへ

―― 今年は医療奉仕のパーティーをネパールに出されるとか。

遠藤　ええ、来年のチャンラの偵察も兼ねて。西ネパールのほうが医療の恩恵を受けていない人が多いしね。どうせ行くなら何かひとつくらいはネパールのためになることをしてあげたいと思って。

―― 何人ぐらいで行かれるんですか。

遠藤　まだはっきりしていないけど、まあ2～3人かな。

―― 長く活動されるんですか。

遠藤　うーん、行くお医者さんの立場でやれる範囲内ですね。どのくらい薬が集まるかということもあるし……。

―― そういう遠征だったら集まんなきゃ嘘ですよ。

遠藤　ボゴダの時のがまだかなり残ってるし、あと集められるだけ集めて……。

―― それでチャンラの下見もしてくるわけですね。えらいド辺鄙な所のようだけど、大変ですね。

遠藤　そうなんです。そのこともあるから村の人たちと仲良くなっておきたいのね。

―― あの辺の事情にはうといんですけど、どこをどう通って行くんですか。

遠藤　ジュムラまで飛行機で飛んで、そこからララ峠って3000なんぼかの峠を越えていくんですけど、ララ湖まではトレッキングパーミッションで入れるようね。そこから先は遠征隊じゃなきゃダメのようだけど。

―― ジュムラからチャンラの麓までどのくらいかかるんですか。

遠藤　あの辺は昔の北大の記録があるだけで、あとぜんぜんわかんないんですよね。

―― ああ、あのナラカンカールを捜しているうちに中国へ越境してつかまっちゃったやつ。

遠藤　そうそう。あの時、ジュムラ～シミコットが11日。そこからチャンラのBCまでどのくらいかかるかはわからない。

―― あの辺は食糧事情も悪いんでしょうね。

遠藤　非常に悪いようですね。ジャガイモひとつとっても、ひとつの村で必要量が入手できないかもしれないし。

―― あの辺に登山隊が入るのは、北大隊以来ですか。

遠藤　ええ。というよりも今までに北大隊だけしか入ってませんね。

●女は子供ができると難しい

―― チャンラってどういうタイプの山なんで

すか。

遠藤　どういうタイプっていわれても……。

――とんがってるとか、丸いとか、四角いとか、三角とか（笑）。だいたいはわかってるんでしょ。

遠藤　うーん、だいたいわかってないです（笑）。いや、ぜんぜんわかんない（笑）。

――はあ――っ。そりゃいいですね。今どきルートどころか山容もわからない山に行くなんて羨ましい限りで。

遠藤　ええ、とっても夢があるのよね。まあ夢を見ているうちが花だけど、いざ登るとなるとどういうことになるのやら（笑）。登るよりＢＣにたどりつくまでのほうが難しいかもしれないしね。去年のボゴダも未踏峰ということで選んだんだけど、未踏峰とはいってもあの山の場合は、地図はできてるんですよね。ただ頂上が未踏だというだけの話なのね。だからどうせ行くなら、今度はまったく未知のところへ行きたいと思ったんです。

――本番は何人ぐらいで行かれるんですか。

遠藤　日本側10人とネパール側３人、日本側はちょっと多すぎるけど、３人ぐらい減っても補充しないで済むし、まあいいかなと思ってます。

――旧マナスルメンバーも行かれるとか。

遠藤　ええ、あの時のメンバーもまだまだ結構がんばってますよ。

――息が長いですね。

遠藤　ただ、女って子供ができてしまうと２～３年は難しいんですよね。中には１才にもならない子供をほったらかして行っちゃう人もいますけど（笑）。人格形成の大事な時にそんなことしていいのかなあなんて心配したりして（笑）。

――ほったらかすったって、たかだか２～３カ月のことでしょ。人格形成云々はあんまり関係ないんじゃないですか。なんて知りもしないで無責任かな（笑）。

遠藤　そう、その辺の難しさは男の人にはわからないんじゃないかしら。

――でも、そういうものを乗り越えてなおやるというのは、すばらしいですね。

●何も知らずに飛び出して

――古い話になりますが、同人ユングフラウっていう組織は、あのイストル・オ・ナールの時に結成されたんですか。

遠藤　いや、そうじゃないです。1965年ですイストル・オ・ナールは68年でしたから。

――あの本、感激して読みましたよ。

遠藤　登頂に関しては、あとでクレームがついたけど。

――でも、あれはその時点ではわからなかったことだから。それよりもあの時代に女性３人で7,000ｍをやったっていうのは、やはり大変なことですよ。しかもトルコからイラン、アフガン、パキスタンと延々と登り歩いてきてでしょ。すごい女がいるもんだと思いました（笑）。

遠藤　なんにも知らないからできたんですよ。朝日新聞の後援が欲しくて本多勝一さんの所に行ったら「こりゃダメだよ。最初に一番登りたい山に行かなきゃ。計画が逆だ」なんて言われたりしてね。恐ろしいということをまるっきり知らなかった。

――荷物を運ぶだけでも大変だったでしょ。

遠藤　200Kgくらい持ち歩いていたかなあ。イストル・オ・ナールの分のは別に300Kgカラチに別送してたけど。でも、女の子ばっかり三人だったでしょ。どこへ行っても男の人が親切にしてくれたから、そんなに大変じゃなかったですよ。

――ああ、なるほど。我々男性じゃそうはいかない（笑）。で、結局本多さんの忠告も無視してアララット、ジロ山群、デマヴェントと登って最後に本命のイストル・オ・ナールですよね。

遠藤　半年かかりましたよ。まあ、女三人だけで7,000ｍを越えられたというのは、私を除くあとの二人が非常に強かったということですね。今ＲＣＣ代表の須田さんの奥さんになっている芦谷洋子さんとか、70年にエヴェレストに行った渡部節子さんとか。とにかく強かった。

――渡部さんはあのあとＨＡＪ北海道の渡辺さん（１973年ＨＡＪカンジェラルワ隊長）と結婚されたんですね。

遠藤　そうそう。芦谷さんはひと頃ＩＣＩ石井

で働いていて、当時旦那さんを養っていたのね。今は旦那さんの仕事を手伝ってるけど。

●高度から未知へ

―― で、イストル・オ・ナールの次がマナスルですね。

遠藤　そうです。ただ、その前に同人が参加したエヴェレストとマカルーがありますけどね。最初に声がかかったのがマカルーの原さんからで、あの時はえらいことになったと思いましたよ。洋子ちゃんなんだけど、こんなものすごい隊に入ってこの娘大丈夫かしらなんて思ったけど、でも入れてくれるって言うんだから、行ったほうがいいと思ってね。節ちゃんは日本山岳会のエヴェレストに申込んで入れてもらえることになった。

―― なるほど、そうして経験積んで74年に、いよいよユングフラウ隊のマナスルとなるわけですね。

遠藤　あの時は、私ちょっと無理がたたって出発間際に肝臓悪くして行けなくなっちゃった。それで現場は中世子直子さんに任せることにしたんだけど……。

―― マナスルまでは高度をめざしてたんですね。

遠藤　ええ。やっぱり8,000ｍをということで。8,000をやるためには、まず7,000ということでイストル・オ・ナールをやったんですよ。イストル・オ・ナールの時、頂上でビバークしたことが自信につながった。

―― やっぱり8,000っていうのは、越えなければならないひとつのラインですよね。これを越えることによって、次の展望が開けてくる。

遠藤　そうですね。でもマナスルやってる時に次は低くてもいいから、未知のところっていう気持が出てきたんですよ。まず8,000を仕上げてから次は未知のところということですね。でも、実を言うとマナスルの時、同時に未知のところへも出したんですよ。ドバニなんですけどね。マナスルなんて興味ないっていう人たちが行ったんです。ところが彼女たち、登路が見つけられなくて、フンンザあたりでブラブラ遊んで帰ってきちゃった。それで公表しなかったんだけど。

―― 今、イスラマバードにいる督永忠子さんはその時の人ですか。

遠藤　そうそう。彼女も気の強い人でね。ものすごう頑固やわ。でも山にはひとつも登らんで、そのかわりに「いい人」を見つけて来ちゃったのね（笑）。

●女性の登山史をまとめたい

―― そのあと、しばらく活動がなかったですね。

遠藤　ええ、ちょっとなかったです。ひっぱっていく人がいなくてね。それにマナスルで一人死なせてるでしょ。その総括にえらく時間がかかって、それが一段落したら、私自身ちょっと拍子抜けしちゃって……。

―― 私が初めて遠藤さんにお会いしたのが、2年前の都岳連の海外登山研究会の時なんですが、あの時はもうボゴダに向かってがんばってましたよね。

遠藤　ええ、ボゴダはずっと以前から追いかけてました。

―― 同人ユングフラウは、これからずーっと未知をめざされるんですか。

遠藤　そう考えてます。「超わからない所」をめざしたいですね。そういう所にいろいろと申請出してるんですよ。コンロンとか……。

―― ウルグ・ムスターグあたり？

遠藤　ウルグ・ムスターグもそうだし、昔スタインの探ったあたりとか、あとクーラ・カンリにも出してます。

―― 次々と実現させてもらいたいものです。

遠藤　あともうひとつ同人ユングフラウとしてやってみたいのは、女性の登山史をまとめるということなんです。日本だけじゃなくて世界のをね。

―― 一冊の本にして出版されるわけですね。

遠藤　そうしたいと思ってます。そのためにはもっともっと勉強しなければと思って、今は資料を集めてるんですよ。

―― 楽しみですね。期待しています。今日はありがとうございました。

（インタビュー構成　角田不二）

地域ニュース

《イ ン ド》

インド・ヒマラヤの登山料改定＝IMF

このほどＩＭＦは、インド・ヒマラヤの登山料を下記の様に大幅に値上げしたことを通告してきた。これを見ると値上げ幅は2.5倍にもなっており、ナンダ・デビィなどはネパール・ヒマラヤのエベレストよりも邦価換算すると高いことになる。

この規則改定は1982年1月1日から適用されるとの事であるが、今年の登山隊ですでに登山料を払い込んだ隊へも適用されるのかどうかは不明であり、目下問い合わせ中である。

ー新登山料ー

ナンダ・デビィ主峰、東峰	15,000 R・S
21,000フィート以上の山	10,000 R・S
21,000フィート未満の山	7,500 R・S

トピックス

'82年ヒマラヤ登山学校第一回合宿

本年インドヒマラヤ・カシミール「クン峰」にて実施される登山学校の第一回合宿がＨＡＪルームに参加者全員が集まって行なわれた。

日時　1月9日13時～10日12時

隊側は土居正勝隊長、稲垣公平副隊長、今野一也、角田不二両インストラクターが出席し、協会側から山森事務局長、尾形好雄登山学校事務局長が参加し一般隊員13名計19名であった。

初めに山森事務局長の司会で隊員の自己紹介、次いで昨年の登山学校隊遭難の後を受けてこの事業を継続するに至った経緯と登山学校の趣旨が説明された。又、今後の日程とそれぞれの隊務分担を決め、夜の懇親会も盛大に行なわれ、初めての顔合わせではあったが、半年後の成功を誓い合って散会した。尚、時期は7月下旬から約35日間（本隊）の予定である。

―ヒマラヤ登山―
「やること、やるべきでないこと―

―WHILE IN THE HIMALAYA "DO'S AND DONT'S ― と題されたこの本は、インド・ヒマラヤにやって来る登山者の為にＩＭＦから出されている手引書である。

昨夏、来日されたＨ・Ｃサリーン氏がインド・ヒマラヤへ来る前に是非一度読んで貰いたいとご持参下さったこの小冊子を会員の木村陽子さんが邦訳され、この程上梓の運びとなりました。

インド・ヒマラヤへお出かけの皆さん是非ご一読下さい！

Ｂ5版14頁　1982年1月10日発行　日本ヒマラヤ協会刊　頒価300円（送料170円）連絡先～HAJ事務局

札幌ヒマラヤ会議予告

日時　2月21日（日）

場所　札幌市西区民センター
札幌市西区琴似2条7丁目

交通　地下鉄東西線琴似駅終点下車
南へ250m（徒歩5分）

会費　1,500円（資料代含む）

定員　50名

内容　カンチェンジュンガ'81年報告
高所登山のトレーニング

第三回インド・ヒマラヤ会議報告

新春早々、第三回インド・ヒマラヤ会議が東京で開催された。会場には今年の登山隊の方々を中心に、遠くは北海道や九州からも多勢の方が参集され30名の参加者となった。

昨年相次いだ遭難事故の事もあってか2日間にわたった会議も熱心な討議が行なわれ盛況であった。

日時　57年1月9日（土）13時
　　～10日（日）12時

場所　東京都勤労福祉会館（八丁堀）

会議は尾形好雄の司会で進め、主催者側として稲田専務理事より会議の主旨説明と挨拶があり、その後、参加者紹介がなされ日程に入った。

内容のあらましは次のとおりである。

「インド・ヒマラヤ登山をめぐる諸問題」

（13：15～17：20）

はじめに昨年相次いだインド・ヒマラヤの遭難事故に対してＩＭＦ総裁のサリーン氏から寄せられた要望事項について稲田専務理事より説明がなされた。続いてインド・ヒマラヤの登山規則関係については、'80年、'81年の渉外経験を基に尾形より登山規則、登山料、ウォーキー・トーキーの申請、ビザ申請、隊荷発送からインドに於ける通関など色々な手続の実務面についての話がなされた。

小休憩の後、インド内のエージェント利用について契約内容や料金等についての話しとなり、臨席したシカール・トラベル社のＣ・Ｓクマール氏やシータ・トラベル社のＳ・サラン氏を混じえてかなり突っこんだ話しがなされた。

最後に現地情報としてナンダ・デビィ内院、ピンダリ河、ガンゴトリ、カシミール方面のアプローチに於ける情報提供がなされた。

「1982年登山隊の計画概要」

（17：25～18：00）

参席された１２隊の登山隊の方々から登山計画の概要を発表して戴いた。

「1980年'81年隊の登山報告」

夕食後、スライドを混じえながら次の登山隊の報告がなされた。

'80年、ビエン・ガパ（神大Ⅱ部Ｗ・Ｖ部）

'80年、バギラティⅡ峰（女子雪氷クラブ）

'81年、スワルガロヒニ峰（前橋山岳会）

'81年、トリスル（仙台山岳会）

'81年、ナンダ・カート捜索隊（ＨＡＪ）

以上で第一日目の日程は終了した。終了後は宿泊室の方に場を移して夜遅くまで懇親かたがた情報交換が行なわれ賑やいだ。

２日目は、インド・ヒマラヤの遭難対策を中心に会議が進められた。山森事務局長からＩＭＦ監修ＨＡＪ訳出の小冊子「Do's and Dont's」の説明後、'80年'81年の遭難事故原因について例を挙げてその究明が行われた。更に稲田専務理事からヘリコプター出動に到る手続が実例を交えて説明された。

最後に、不幸にも死亡事故が発生した場合の事後処理手続きとこれに必要な付保について山森事務局長から説明があり、２日間にわたる会議を終了した。

インドヒマラヤ1980年リスト（その2・インド隊）

資料：I.M.F提供
（「ヒマラヤ」vol120に続く）

S.NO.	Objective	Height	Organiser/ Sponsorer	NO. of team members with name of the LEADER	Period	Result
			Indian			
	Kashmir					
1.	Brahmva Glacier Region Exploration.	- - - -	Institute of mountaineering Exploration, Calcutta.	14 G.Chakraborty	September/ October	Successful.
2.	Harmukh	5142m/ 17,143ft.	J&K Mountaineering & Skiing Club.	6 Fayaz Ahmed Bala.	September	Unsuccessful.
3.	Kishtwar Pahalgam region 190-km trek.	- - - -	Air Force Trekking, Mountaineering & Skiing Association.	13 Sqdr. Leader H.S.Dhillon.	Pre-monsoon.	Successful.
4.	Ladak-Zaskar-a 504-km trek.	- - - -	The Mountaineers, Bombay.	2 Harish Kapadia Bhufesh Gupta.	July/ September	Successful.
	Himachal Pradesh					
5.	Bara Shigri Glacier Survey & Climb of on Unnamed Peak.	5791m/ 19,000ft.	Giri-Doot, Hooghly.	7 Kalayan Chakraborty.	July/	Successful.
6.	- - - do - - -	18,000ft.	Himalayan Association, Calcutta.	5 P. Lahiri	September	Successful.
7.	Deo Tibba	6001m/ 18,687ft.	St. Stephen College, Club, N. Delhi.	11,(9 Girls) Pratul Pathak.	June	Successful. Norbu (5198m/ 17,155ft), was also climbed (Rukmani Mukherjee and Amrita Cheema Norbu along with Sherpa Tashi).

8.	Deo Tibba Indra San.	6001m/19,687ft. 20,410ft.	Climbers Groupe, Calcutta.	Ranjit Rit.	September	Failed. Climbed peak Pang Neru (17,750ft.).
9.	Deo Tibba	6001m/ 19,687ft.	Thane Mountaineers	5 Miss Vijaya M. Gadre.	September	Successful. (Leader, Vidyasagar V. Oke, Prakash K. Vaiby, Zuzer S. Rangwala, Phalgun, Ladu, and cook Phinzak). Also climbed Norbu (5198m/17,155ft.)
10.	Dharam Sura or White Sail	6446m/ 21,148ft.	Ordnance Factory Trekkers, Ishapore.	18 Sambhu Nath Kar.	August/ September	Successful.
11.	Friendship	17,350ft.	Giri-Vihar, Bombay.	14 Mukund Deodhar	June/ July	Successful.
12.	Gayphang Goh I and II	19,750ft. 19,250ft.	Bharat Outward Bound Puonneers, Pune.	6 Prakash B. Karyekar.	August/ September	Failed.
13.	Hanuman Tibba	5928m/ 19,450ft.	Crescent Club, Chittaranjan.	9 Santi Ranjan Dutta.	September	Successful.
14.	Karnarang I II III	18,330ft.	Himanish, Dhanbad.	9 Abhijit Mazumdar	September	Could reach a peak 18,100ft.
15.	Kugti Pass-a trek.	16,800ft.	Howrah District Mountaineers & Trekkers' Association.	13 Mrinmay Mitra.		Successful.
16.	Kulu Pumori	21,500ft.	Pune Mountaineers.	8	August	Successful. An unnamed peak (16,900ft.) was also climbed.
17.	Kut Valley-a trek.	- - - -	Western Himalayan Mountaineering Club, Simla.	2	May/ June	Successful.
18.	Ladakhi Manali Friendship	18,400ft. 18,600ft. 17350,ft.	Giri Vihar Mandal, Madras.	9 D. Lingappa.	May/ June	Climbed Ladakhi only.

19.	Lonat Area Kinnaur I Unnamed II Peaks III and carry Scientific Survey.	5909m/18,499ft. 5300m/17,490ft. 5296m/17,468ft.	Mountaineers Youth Ring.	20 M. K. Bandopadhyay	September	Climbed Peak II and III ; failed on peak I. Research work in geomorphology was carried out.
20.	Manali.	18,600ft.	Vileparle Mountain Climbers, Bombay.	3 Deepak Mahajan.	September	Failed due bad weather.
21.	Parvati South Unnamed Peak	6127m/ 20,101ft.	Bharat Outward Bound Pionners, Pune.	9 V. N. Thorat	August/ September	Abandoned at 18,700ft. due to snowfall.
22.	Parvati Glacier-Exploratory trek.	- - - -	Hikers & Explorers.	10 Ardhendu Mukherjee.	October.	Successful.
23.	Parvati South, Unnamed Peak.	6127m/ 20,101ft.	Climbers' Club, Bombay.	6 Ravi Kumath	October.	Presumed Successful. No details reported.
24.	Reo(or Leo)Pargial (South).	6791m/ 22,280ft.	Hiking Club, St. Stephen College.	20 Romesh Bhattacharji.	May/June	Unsuccessful.
25.	Reo Pargil North.	6791m/ 22,280ft.	National Cadet Corps.	34 Major Kiran Kumar	September/ October.	Successful. Press reporter G. Murali, accompanying the expedition, died of Pulmonory Oedema on October 1 at Camp I (19,500ft.)
	Uttar Pradesh.					
26.	Bharate Khunta. Kedarnath Dome Kedarnath Peak	6578m/ 21,580ft. 6830m/ 22,410ft. 6940m/ 22,770ft.	Rajput Regiment and Kedriya of Vidyalaya of the Rajput Regimental Centre.	48 Col. P.K. Kukrety.	May.	Successful; all Objectives achieved. A number of climbers suffered from frostbite, seven were evacuated by air. Four suffered snowblindness.
27.	Bharte Khunta	6578m/ 21,580ft.	Paribharaman, Ahmedabedab.	7 Miss Urvashi J. Jagirdar.	May.	Successful. This was the first ascent of the peak by a lady mountaineer.
28.	Black Peak (or Banderpunch I)	6387m/ 20,956ft.	National Cadet Corps.	17 Col.(now Brig.) Jagjit Singh.	June	Successful..
29.	Black Peak	6387m/ 20,956ft.	Add-Venturers, Calcutta.	7 Asit Moitra.	September.	Successful.

30.	Darwa and an Unnamed Peak.	13,554ft. 16,000ft.	A group from Pune.	3 Dr.G.R. Patwardhan.	May/June	Successful. This Expedition was wrongly included in the list of 1979 climbs.(Indian Mountaineers 6).
31.	Deoban and Mana	6853m/23,480ft. 7272m/23,860ft.	Artillery Regiment, Indian Army.	22 Col. D.K.Khuller	May/June	Climbed Deoban only. Garud-bang(6000m) was also climbed.
32.	Gangotri Region, Unnamed Peak.	16,400ft.	Pune Mountaineers.	24 V.G. Deodhar.	June	Successful.
33.	Gangotri Region- a trek to Kedarnath.	- - - -	Bharat Scouts and Guides, W/Bengal.	28 Adhir Roy.	August, September.	Successful.
34.	Home Kund Gulli-a trek.	17,170ft.	Himalayan Enjoyers Association.	6 Joydev Paul.	September.	Successful.
35.	Jogin I Jogin II Jogin III	21,210ft. 20,805ft. 20,065ft.	Jadavpur University Mountaineering & Hiking Club.	8 Amit Chowdhury.	September.	Successful. climbed all the three peaks.
36.	Kamet. Abi Gamin.	7756m/ 25,447ft. 7533m/ 24,130ft.	Electrical and Mechnical Engineers (EME)	19 Major J.K.Bajaj.	May/June.	Successful. both the peaks climbed.
37.	Kalindi	6120m/ 20,020ft.	Pune Ladies'.	7 Miss Arundhati N. Joshi.	September	Abandoned. Ended with tragic deaths of the leader and Vijay Mahajan.
38.	Kedarnath Dome	6831m/ 22,047ft.	K.K.De	1 K.K.De.	September/ October.	Successful. Solo Climbe.
39.	Matri	6721m/ 22,047ft.	Pune Mountaineers	7 Vijay S. Mahajan.	May/June.	Failed.
40.	Mrigthuni & Devtoli.	6855m/ 22,490ft.	Himalayan Lover's Association.	12 Chanchal Mukherjee.	September.	Climbed Mrigthuni only.
41.	Nanda Devi Main	7816m/ 25,645ft.	Sappers(Corps of Engineers.).	24 Capt. Jai Bhaguna.	June	Unsuccessful. due to bad weather. The leader and some others suffered frostbite.
42.	Nandaghunti	6309m/ 20,700ft.	Parvat Abhiyatri Sangha of Calcutta.	13 Namai Basu.	May.	Successful.

43.	Raktavarn Glacier; Unnamed peak.	5846m/ 19,292ft.	Parvatarohi, Bombay.	8 Ranvir Singh	October.	Successful.
44.	Routi Saddle, Chanoria Peak.	17,170ft. 16,586ft.	Howrah Distt. Mountaineer's & Trekkers Association.	14 Debrata Bhattacharya.	September.	Successful.
45.	Raktavarn Glacier Unnamed Peak.	5817m/ 19,086ft.	Rocks & Snow, Calcutta.	9 Amulya Sen.	November.	Successful.
46.	Rudugaria	5819m/ 19,090ft.	Pune Ladies	3 Miss Shoba V. Anklekar.	September.	Successful.
47.	Rupkund, Hemekund Ronti Saddle a trek.	16,000ft. 15,700ft. 17,170ft.	Y.H. Explorers Club, Bhadrakal Town Unit.	12 Aparesh Bhattacharjee.	September.	Successful.
48.	Rupkund, Hemekund-a trek.	16,000ft. 15,700ft.	Chittranjan Rover Crew.	4 A.K. Kaul.	September.	Successful.
49.	Satopanth Glacier, an Unnamed Virgin peak.	20,587ft.	Himalayan Club, Bombay.	6 Shashank Kulkarani.	May/June.	Objective was not achieved but an unnamed virgin peak (20,210ft.) was climbed.
50.	Sudarshan.	6505m/ 21,350ft.	Himalayan Association, Calcutta.	7 Ujjawal Ganguly.	?	Unsuccessful; could attain the elevation of 20,500ft.
51.	Suraj Kund-a trek.	15,600ft.	Hooghly Distt. Adventure Lovers' Association.	15(2 ladies) Miss Bani Bose.	May/June.	Successful.
52.	Trisul I Bethartoli South Devtoli Ridge Peak	7120m/23,360ft. 20,740ft. 22,270ft. 21,220ft.	Tushar Manab of Dhanbad.	8 Aninda Kumar Sen.	September.	Climbed Trisul I (NW Face).
53.	Valley of Flowers-a Scientific Exploration.	- - - -	Assam Science Society.	11 Khagandra N. Bora.	October.	Successful.
	Sikkim.					
54.	Guicha Unnamed Peak.	6115m/ 20,602ft. 5740m	The Institute of Exploration, Calcutta.	9 Asit Kumar Roy.	April.	Abandoned at 19,000ft. due to bad weather, Shortage of Kerosene Oil and food.

55.	Gurudongma.	6717m/22,166ft.	Assam Rifles.	21 N. Sharpa.	April/May.	Successful. First ascent.
56.	Lama Angdang.	19,500ft.	Climbers' Circle, Calcutta.	?	October.	Abandoned due to bad weather.
57.	Sugar Loaf	6435m/ 21,180ft.		8 H.C. Ghosh.	October.	Abandoned due to technical difficulty of climb.
	Nepal.					
58.	Annapurna Sanctuary a trek.	- - - -	Abhijatrik, Calcutta.	7	May.	Successful.
59.	Annapurna Sanctuary Tent Peak.	18,600ft.	Trail Blazers of Bombay.	7 Raghu Iyer.	October.	Abandoned at 18,400ft. 200ft. short of the summit.
60.	Everest Base Camp.	- - - -	National Cadet Corps.	Col.(now Brig) Jagjit Singh.	- - - -	Successful.
61.	Kalapthar & Everest Base Camp-a trek.		Trekkers India.	9 Sujit Ghosh.	September.	Successful.
	Assam.					
62.	Expedition "Blue Venture" Sailing Venture in Brahmputra, from Dibrugavh to Gauhati.	- - - -	National Cadet Corps, N.E. Region Shillong.	24 Lt. B.K. Baisya L.N.	December.	Successful.
	Manipur.					
63.	Shiroi Peak— a 260km trek.	17,000ft.	Manipur Mountaineering & Trekking Association, Imphal.	350 (Boys, Girls Officials.)	November.	Successful. First Venture. The route, Imphal, Litan, Ukhrul, Kaugkhui Cave, Shiroi Village, Shiroi Peak (17 November).

▲C3からのガッシャーブルムⅠ峰

はじめに

8,000 mの空気を実際に味わいたい。そして全員、頂上に立ちたい。その様な目的から協会内の一部より海外登山研究会が発足し、カラコルムのガッシャーブルムⅠ峰への登山隊が生まれた。当初より全員が登頂できることを目標にして、初登ルートのIHE稜をルートとして選択した。このルートで問題になるのは、IHE稜を抜た7,000 m台の3Kmにおよぶ雪原の縦断であった。ラッセル、降雪がどの程度になるかによって成否がかかっていた。実際にはホワイトアウトで行動できない時はあったが、ラッセルの問題はほとんどなかった。悪天候、アクシデント等で登山期間の予備日ぎりぎりの8月3日2名の登頂者を出すことが出来た。

キャラバン

今年からカラコルム・ハイウエーが通行できるようになり、5月14日先発2名、22日本隊10名出発し、本隊到着後3日目にはイスラマバードを出発した。27日ワゴン。28日にはトラックがスカルドへ着く。K2隊の先発が準備しており我々も同宿する。総隊荷は4,000 Kgになり、ポーターを160名必要となったが、DCオフィスの推めもあり半分だけスカルドで雇う。

5月30日、ダッソーへトラクター、ジープで向う、途中道路に大石が落ちていて道路工事をして進む。

5月31日、残り半分のポーター雇用。リエゾンオフィサーが大声を出して、日程、賃金、装備、食糧の確認する。BCまで12日、ウルドカスで1日休日、食糧はアスコーレ以奥スポロまで金で支給とする。

6月1日、予定より1日早くキャラバン開始。出発までに3時間かかる。トラブルのないことを祈

る。

6月3日　最奥部落アスコーレに3時間で着き、村長のハジマディーンの所から、山羊、アタを買う。

6月5日　昨日ルモンド川の渡渉を2名が試みるが深くだめであったが、昨夜冷えこみ、朝水溜には氷が張るほどであった。刺すように痛さを感じる川を渡渉することが出来た。1日分の賃金、食糧が助かる。

6月6日　国内のキャンプ地のようなパイジュのキャンプ地を後にバルトロ氷河に入る。左岸にはパイジュ、左手にはバルトロの寺院群をみながら進む。

6月7日　ウルドカス。マッシャーブルムのアメリカ隊リエゾンがコックと2人留守番をしていて出迎えてくれる。

6月9日　昨日の休日は雪降り。氷河上に積った雪がだんだん多くなり、ゴレポロに泊。G4隊と一緒になる。彼等は天気が悪く停滞になったのでポーターを帰し、コンコルディアのBCへ荷上げをしていた。出発前から協力し合って来たのでなつかしい。ここは氷河の真中で、正面にブロードピーク、G4が見え夕焼がすばらしかった。

6月11日　小雪が舞う、コンコルディア（現地ではコンコリヤと言う）の端から、ポーター3名隊員2名がルートを作る為先行する。雪の深い所はヒザまでくる。フィックスを張りセラックの上を渡っているころより吹雪になり、ポーター4名が失神状態になる。熱い紅茶を飲ませ保温して元気を回復させた。

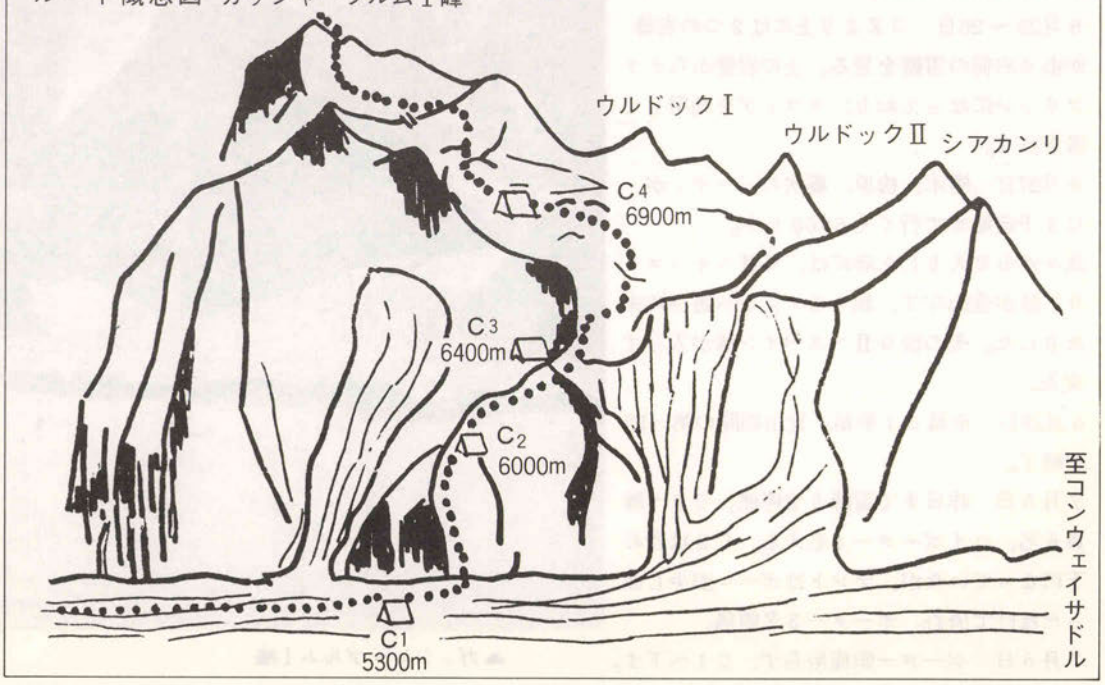
6月12日　快晴。K2が今日はじめて全容を見せてくれる。さすが第2の高峰だけあって大きい。昨日3時間位の行動になってしまったので、今日は長いコースになりポーター達が疲労してしまい予定地より1時間半位手前になったがBCを建設する。

登山活動

6月13日　ポーター20名残し、唐木、藤次が荷上げ。20名の内からハイポーター4名、メイルランナー2名雇用。

6月14日　今日より本格的な登山活動とする。木下、唐木、ハイポーター3名でCⅠへのルート偵

ルート概念図　ガッシャーブルムⅠ峰



察。昨日の荷上げルートは途中までで使えない。右側の平らな氷河をルートにする。アブルツィ氷河をシアカンリめざして逆行し、ＩＨＥ稜末端のＣ１予定地まで登る。

６月17日　Ｃ１建設。5,300ｍ。３名入るキャンプの前にＩＨＥ稜末端の岩壁がそびえ背後にはシアカンリ、左にはバルトロカンリがどっかりと座っている。ルートはＩＨＥ稜末端を右へ廻り込み、岩壁と雪壁とのコンタクトラインの雪壁を登り、稜に出て、稜線上を登る。

６月19日　18日よりのルート工作でＣ２予定の6,000ｍまで到達する。途中いつの登山隊なのか分らないが残置ロープを２本見つける。Ｃ２予定地は良いテント場所が全々なく雪壁をカットして作ることにする。隊長他２名を除いて。Ｃ２まで２回の荷上げ等を行い順化を計った。

６月22日　全員ＢＣ集結。以後登山終了までＢＣ下山はないので、個装、隊荷の整理をする。

６月24日　Ｃ２(6,000ｍ)建設。建設にあたって、東が上部に適当な所がないか100ｍ登るが引返す。Ｃ２入パーティとサポートの６名でテント１張と荷物置場を作る。昼日中なので暑くて体がだるい。Ｃ２からはＣ１、ＢＣ方向が見え、チョゴリザ、マッシャーブルムが美しく眺められる。

６月25～26日　Ｃ２より上には２つの岩峰があり右側の雪壁を登る。上の岩壁からナイフリッジになっており、スコップを利用して雪を払う。

６月27日　唐木、梅原、藤次のパーティが、Ｃ３予定地まで行く（6360ｍ）。

我々がＢＣ入りした時には、ＧⅡへオーストリア隊が登山中で、我々のテントへ遊びに来たりした。その後ＧⅡへスペイン隊が入って来た。

６月29日　全員Ｃ１集結。登山期間の第一期が終了。

７月５日　昨日まで雪降りで停滞。Ｃ２へ隊員６名、ハイポーター４名入る。Ｃ２は雪の下になっていたが、テントはポールが少し曲っただけで済む。ポーター３名頭痛。

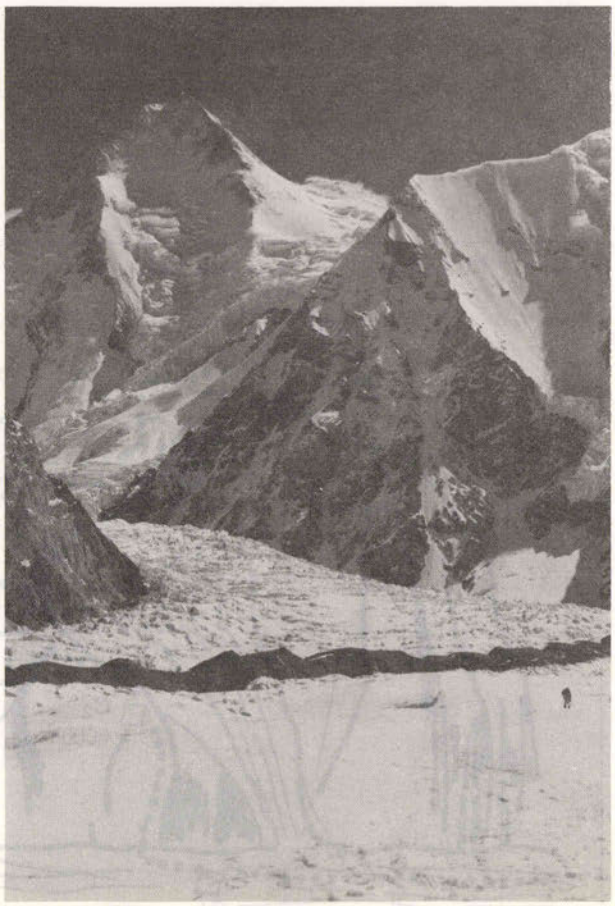
７月６日　ポーター頭痛治らず、Ｃ１へ下す。

東、調子が良くないので休養にして５名Ｃ３へ荷上げ。6,200ｍから始まるナイフリッジをトップが20ｍほど進んだ時、Ｃ２からテントがつぶれたと連絡がくる。トップの払った雪がだんだん雪ダルマでナダレになった。荷上げはやめＣ２を堀り出すが、テントが２張だめになる。再度あっては危険なので、200ｍ下へ移動させることにして全員Ｃ１へ下山。東は寝ていて雪の下になったが無事であった。

遭難救助

７月７日　新Ｃ２建設。Ｃ１では昨日のテントをガムテープで修理する。

７月８日　午後４時の交信時に、ＢＣへ戻っていたリエゾンオフィサーからＧ４の遭難の連絡が入



▲ガッシャーブルムⅠ峰

る。電池が弱いので聞きとれない。再度５時に取る。Ｃ１がやられ４人重傷、１人行動可能。ポーター１名が救助依頼に来ていた。登山は続行させることにして、救助に行くことにする。Ｃ２にいる隊長、植田、伊藤が、Ｃ１の下鳥、藤本、ポーター１名と今日の内にＢＣへ行き、Ｇ４隊ＢＣへそのまま直行する。明日唐木、ポーター３名Ｃ２より、Ｇ４隊ＢＣへ直行。以後の指揮は野沢副隊長が取る。

７月12日　Ｃ３への荷上げも十分になったので、Ｃ３を建設する（ 6,400 ｍ）。午後４時、ＢＣの伊藤隊長よりの連絡メモが入った。死亡３名、骨折１名。Ｇ１隊は14日にはＢＣへ戻れるとあった。

７月13日　12時の交信で、Ｃ４へのルート工作中の野沢、長林、藤次の内、長林が雪庇が切れ行方不明となったとＣ２へ連絡が入る。１時間後、長林を発見。自力で稜線まで上る。Ｃ２では、伊藤をＧ４隊ＢＣへ向かうよう指示して、Ｃ３へ登る。Ｃ３到着するころ長林が脱出したと連絡が入りほっとする。救助活動の間は、隊長よりくれぐれも気をつけてくれと言われていたのに、一時は皆放心状態であった。長林は胸が痛く歩行が思うようにならなかったが、幸いハキケがないので骨折の軽いので済みそうに見えた。

７月15日　12時間かかってＣ１へ下る。Ｃ１は無人であったので、ガラガラになっていた。

７月16日　Ｇ４救助にいった全員がＣ１へ戻る。ドクター植田の診断で、長林は肋骨が３本骨折の疑いがある。

頂上

７月17日　野沢、植田、ポーター１名をつけ長林をコンコルディアまで下らせ、Ｇ４隊のヘリコプターに同乗させることにして今日下山する。今日よりアタック体制に入る。

７月21日　Ｃ３より上部のフィックス完了。Ｃ４までのルート工作を行う。ブラトーは思ったほどラッセルがなくＣ４到達。

７月24日　Ｃ４入りしたパーティがＣ５を出そうと２日間頑張るが、天候が悪く、ホワイトアウトで行動できずＣ３へ戻る。23日には野沢、植田もＣ３へ入る。

７月27日　24、25、26日Ｃ３で停滞。第一次アタック隊を29日に出すことにして、Ｃ５ルート工作隊がＣ４入りする。

７月30日　28日アタック隊Ｃ４入りするが、Ｃ４は行動できず。アタックメンバーを変更し、作戦を変えてＣ５は出さずＣ４よりアタックすることにして、Ｃ４上部のルート工作隊３名とドクターがＣ３に残り、Ｃ１へ休養に戻る。最終アタックを８月４日とし、この日にアタックが出来なければ、あきらめることに決まる。

８月１日　曇りであるが、ルート工作隊はＣ４へ向う。Ｃ１からアタック隊とポーターがＣ３へ登る。

８月２日　野沢、木下 7,500 ｍとのコルまでルート工作に出る。午後からガスが出て視界が10ｍ位になるが、頑張りコル下５ｍまでせまるが、雪の状態が悪く引き返す。Ｃ３へ戻っていた間に、コルのハンギンググレシャーが崩壊して、ブロックが散らんしており、圧力で大きなナダレが起きていた。アタック隊はＣ４入りして、睡眠に酸素を吸った。

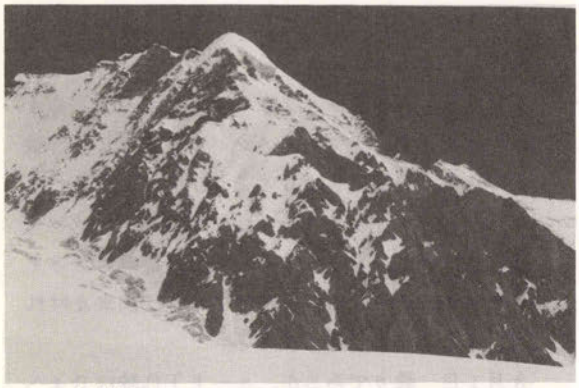
８月３日　昨日の夕方からガスも消え、満天の星空になった。午前２時40分アタック隊の下鳥、東、藤次出発。昨日コルへ抜けられなかったので、ウルドックへの稜線の雪壁をまいてコル上部へ出る。午後３時、藤次のペースが落ちたので、このまま続行するかどうか連絡がくる。一時間近く協議するが、 7,700 ｍ地点まで登っていることと、藤次が元気なので、その場所に待機させ二人でアタックする。５時35分登頂　アタック体制になってから、天候が悪く半分はあきらめていたが、ギリギリの所で最低目標が達成できた。

８月４日　昨日登頂後交信がなく心配していたが、６時前に連絡が来る。 7,700 ｍでビバーグ。木下、梅原アタック隊のサポート、唐木、藤本Ｃ３よりＣ４へサポート。Ｃ４を撤収、Ｃ３へ戻る。

８月５日　隊長よりＢＣまで下山の指示。きついがＢＣまで下る。今日も良い天気である。通いなれたＩＨＥ稜ともサヨウナラと、振り返えりながら、水溜りの出来た氷河をＢＣに帰る。

8月8日　BCを後に帰路につく。

（木下洋亮）



▲IHE稜

隊の構成

隊長　前沢昌弘（37）

副隊長　野沢仁三郎（42）

隊員　木下洋亮（38）　唐木真澄（37）

梅原敏靖（35）　長林公夫（33）

東　英樹（32）　下鳥康雄（31）

伊藤純一（30）　藤本良明（30）

藤次康雄（26）

ドクター　植田俊郎（26）

インドヒマラヤの手引

インドヒマラヤへ出かける登山者の皆さん！申請手続、ビザ、隊荷通関等についてマニアル化した資料が出来ました。頒価1,500円、送料350円　連絡先～HAJ事務局

UNITED TRAVEL SERVICE(P)Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語でひきうけています。本社にも東京事務所にも日本語に堪能なスタッフが多勢おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレンジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。もちろん日本語で!!

東京事務所　〒141　東京都品川区西五反田2—23—11—202　電話 03—493—4920

本社（デリー）　802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India

Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable : YOKOSO

ヒスパー山群 その1

杉本 忠男

カラコルム五大氷河の一つヒスパー氷河の北方に位置する山群は一般にヒスパー山群と呼ばれ、カラコルム・ハイウェーがオープンされて以来毎年おおいに賑わいをみせている。

この山群の範囲は北はシムシャル川、西はフンザ川、南はヒスパー氷河、東はスノー・レイクとビルジェラブ氷河で囲まれる範囲であろう。J・ワラは東端をクールドピン・パスとしているが、これではビルジェラブ・グループが宙に浮いてしまう。(このグループをパーマン山群に入れる説もあるが、少し無理だと思う。)東西約80Km、南北40Kmほどのこの山群はおおよそ北アルプスや南アルプスくらいの大きさで、この中に最高峰のディスタギル・サール(7,885m)をはじめ7,000m峰が13座(マイナー・ピークを含めると24座)、6,400〜7,000m峰は20座を越える峰々が林立している。この山群の大きな特長の一つは(勿論例外もあるが)6,000m峰は急峻な岩稜や氷雪壁に囲まれ、7,000m峰はどっしりした雪のピークが多いことだ。従って登攀技術の面からみれば6,000mは難しく、7,000m峰はその大きさゆえどこかに弱点を持っていて比較的登りやすいといえる。

現在この山群の南面および西面からのアプローチは認められているものの、北面のシムシャル側の入域は強く制限されている。従ってほとんどの山は両面のヒスパー氷河やガレサ氷河から登らなければならず、ルートの選定に大きな支障をきたしている。1982年からシムシャルへの入域が認められるという未確認情報もあるが、またこの国のことだ、実際にそこへ行ってみるまではわからないと考えておくべきだろう。1981年までに登られたピークは以下の通りだ。

ヒスパー山群の主な既登峰

(1981年末現在)

山名	標高(m)	年	パーティ
1.ディスタギル・サール	7,885	1960	オーストリア
2.クンヤン・チッシュ	7,852	71	ポーランド
3.カンジュト・サール	7,760	59	イタリア
〃	〃	81	千葉工大
4.トリボール	7,720	60	イギリス
5.ディスタギル・サール東峰	C.7,700	80	ポーランド
6.ブマリ・チッシュ	7,492	79	北海道岳連
7.ヤズギル・ドーム南峰	C.7,440	80	ポーランド
8.モムヒル・サール	7,343	64	オーストリア
9.ジュトマル・サール	C.7,330	80	東京志岳会
10.ルブガル・サール西峰	7,199	79	西ドイツ
〃	〃	79	法政大二部
〃	〃	80	駒沢大
11.ルブガル・サール中央峰	C.7,200	79	法政大二部
12.クンヤン・チッシュ北峰	C.7,200	79	北大
13.タフルタム	6,651	77	大阪登攀倶楽部
14.スキリッシュ・サール	C.6,650	74	オーストリア

以上のように大方のピークは1980年までに登られてしまった。残るはユクシン・ガルダン・サール(C.7,530m)とマラングッティ・サール(C.7,200m)ぐらいといえよう。ヒスパー山群でも他と同様、初登頂の時代はほぼ終ってしまったといえる。しかし登攀価値というものは人によってまた時代によって変わってゆく。見方を変えればまだほとんどのマイナー・ピークや6,000m峰はいまだに未登のままだし、大方のメイン・ピークもたった一度登られただけだ。他にバリエーション・ルートを考えればまだまだ手ごたえのある充実した登攀が可能であろう。従ってヒスパー山群の賑わいはまだ当分続くのではなかろうか。

これらの主な峰々を筆者の独断と偏見を省みずに紹介しよう。

ルクペ・ラオ・ブラック 6,593m

クールドピン・パスのすぐ西側に聳えるこの峰は、西方から眺めるとタフルタムの黒い岩峰とは対称的に美しい雪の三角錘として望まれる。この山は地理的にはヒスパー山群に入るが、アプローチからすればビアフォ山群の山といえるだろう。スノー・レイクの標高が高いため山の大きさはそれほどでもない。しかし附近に高い山がないので独立峰としての満足感は十分得られるだろう。

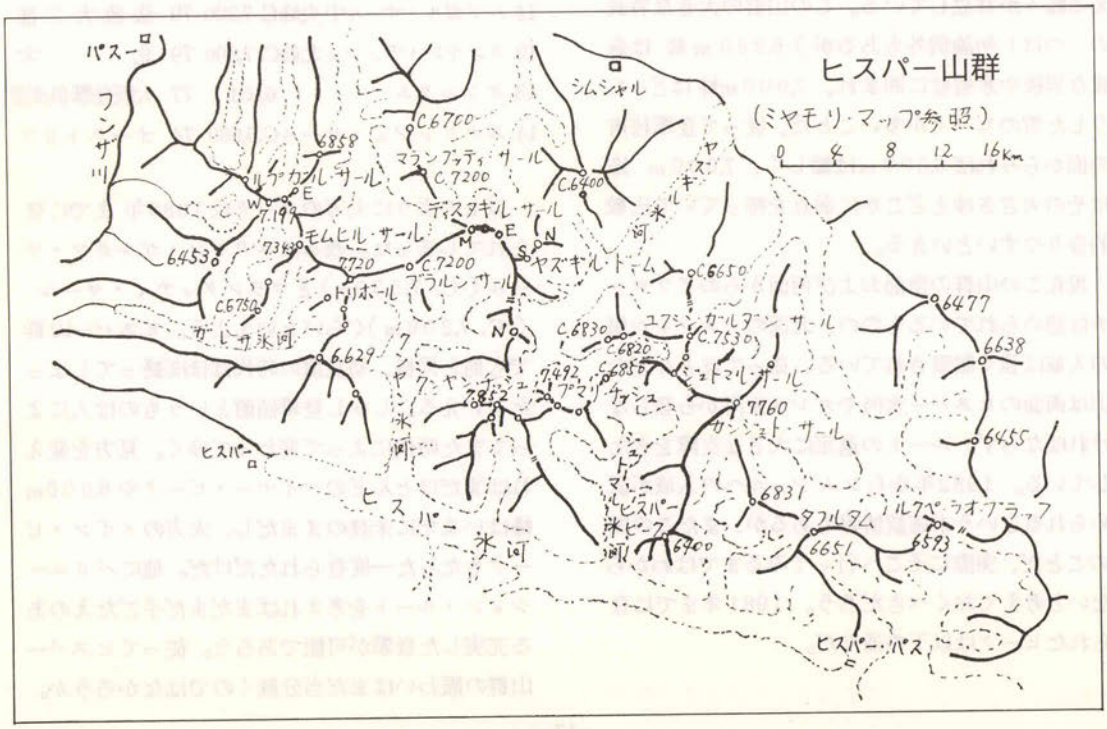
1956年英国隊がこの山の西稜直下5,500 m附近まで試登している。

タフルタム 6,651m

西山会によるヒスパー氷河行の記録が「岳人」257号に発表された。そのグラビアの最初の写真が西側から見上げたこのタフルタムであった。その姿はまさしく天を突くような一大岩峰で筆者などは大きさの感覚がつかめず、こんな大岩峰がはたして登れるだろうかと嘆息をもらしたものだった。しかし意外にもこの山は東方へ細長い頂稜を持ち、南面では標高6,000m附近まで氷河が発達している。タフルタムは1977年大阪登攀倶楽部隊に試みられた。当時はヒスパー側からの入山が認められなかったので、同隊はビアフォ氷河をつめ南西稜上部に抜けるルートからあっさり登ってしまった。だが本当のタフルタムを味わうのはやはりカニバサ氷河からの北西稜や南西稜、それに西壁を登るルートであろう。氷河のつめから頂上まで、高度差約1,500mの岩登りが待っている。

6,831m 峰

カンジュト・サール南稜上8Kmほどのところにあるこのピークは、リトル・カンジュト・サールだとかカンジュト・サールⅡ峰などと呼ばれ、常にカンジュト・サールの属峰であるかのごとくみられていた不遇な山である。だがカンジュト・サールとの最低コルから約1,200mも高度を上げ、距離も槍ケ岳から西穂高ほども離れており、とにかく確かな個性を持った一つの山だ。欧米人の山への命名法の一つにガッシャーブルムⅠ～Ⅵ峰のごとく番号を振る方法がある。しかしまったくの属峰ならいざ知らず、れっきとした独立峰にⅡ峰だのⅤ峰だのと名付けるのはその山の個性を無視



してしまうことになるし、登る方だってすっきりした気分にはなれぬだろう。カニバサ氷河から見上げる南西面は氷雪まじりの急峻なバットレスでなかなか手ごわそうだ。北西稜上部、東南面上部は登れそうだが、両方とも下部の状態がわからない。

カンジュト・サール 7,760m

ヒスパー山群で三番目の高さではあるが、空から眺めたときの風格はカラコルム全体でも第一級の山だ。そのピラミダルな三角錘はK2と見間違うほどの端整さを持っている。現在南稜をイタリア隊に、西面を千葉工大隊に登られているので残るのは長い長い北西稜ということになる。頂上から4Kmほどのところにある約6,600mの小ピークに、ジュトマル氷河から手頃なリッジが上っている。南西稜は上部がリッジの形態を失っているので前記2隊と変わりばえしないルートになってしまうだろう。またシムシャル側がオープンされれば北西稜や南西稜に、小人数でラッシュをかけるパーティが現われるだろう。

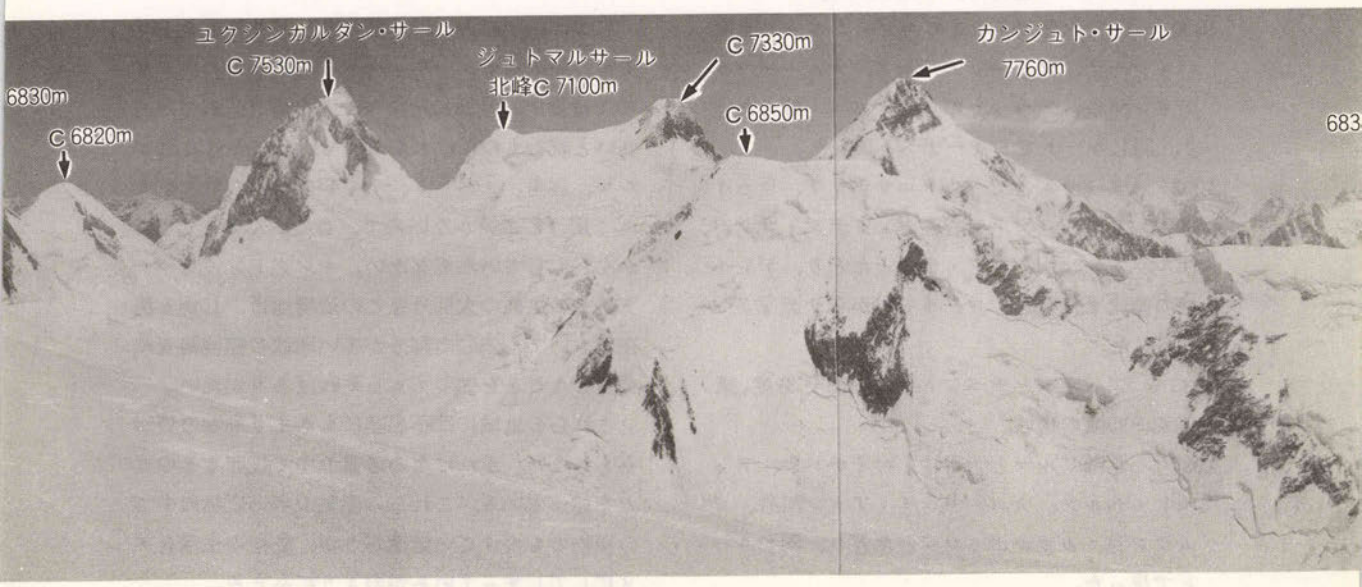
ヒスパー・ピーク(サール) 6,400m

ヒスパー氷河とジュトマル氷河の合流点のすぐわきに聳えるマッターホルン状の大岩峰がこのヒスパー・ピークだ。標高6,400mという数字は推定高度のような感じがする。しかしこの山はE・シプトンによって20,998ft.と測量されており、これをメートル法に換算すると、6,400mというきっちりした数字になってしまうのだ。ヒスパー氷河から頂上までの高度差は2,200m、頂上からは4本の岩稜や雪稜が派生しており、どのリッジからも手ごたえのある面白い登攀ができるだろう。北西壁はヒマラヤ襞をつけたきれいな氷壁だ。

ジュトマル・サール C.7,330m

ジュトマル氷河源頭に位置するこの峰は、南面と東面にけわしい岩壁をしたがえ取りつきにくい山容だ。特に南壁は上部にハンギング・グレシャーをかかえているため安全なルートは見い出せない。だがこれらの壁とは対象的に北西面は比較的ゆるやかな雪面をアッパー・ヤズギル氷河へ落としている。1980年の筆者等の登攀はジュトマル氷河から西稜のコルを越え、アッパー・ヤズギル氷河から北稜を経て登頂した。南面から考えられるもう一本のルートは、カンジュト・サールとのコル(標高約6,200m)へ急激に落ち込む東南稜だ。コル直下にも高度差500mほどの岩壁があり、さらにコルから頂上まで1,100m以上の急峻な岩稜が続く。非常に困難だが登攀価値は高いルートだ。この山の北峰(C. 7,100m)は北稜上のほんの小さなコブで、今のところ登攀価値があるとは思えない。

(つづく)



▲プマリ・チッシュ北稜から(北海道岳連提供)

キングドン・ウォード(2)

水野　勉

前号ではキングドン・ウォードの遠征のあしどりが尻切れトンボになってしまって、読者には申し訳ないことをしてしまった。ああいう風に途中で切れてしまうのは、読む側からはまことにやり切れない思いのするものだ。しかし、なってしまった以上はしようがない。つづけることにしよう。

1926　北部ビルマとアッサム＝ミチーナ、フォルト・ヘルツ、ナム・タマイ、セインク、ディブルク峠、ローイト河谷、それからアッサムのサディアへとたどった。

1927－28　アッサムのミスミ高原。

1929　ビルマとインドシナ＝3月と4月は南部シャン地方、ビルマで過し、5月と6月は上部ラオス、インドシナで過した。このときはシカゴ自然博物館後援のウィリアム・V・ケレイ＝ルーズヴェルト遠征隊と一緒だった。

1930－31　北部ビルマとビルマ・チベット国境＝ミチーナ、フォルト・ヘルツ、ナム・タマイ、アドン河谷、チベットの隅のナムニィ峠とたどり、同じルートでミチーナへと戻った。

1933　アッサムとチベット＝サディア、ローイト谷、リム、ロン・テ谷、シュグデン・コンバ、サルウィーン川、ロン・テ谷とたどり、デレイ谷の源流まで行き、ローイト谷からサディアへと戻った。

1935　アッサムとチベット＝北緯28－31度、東経92－95度の地域。

1937　北部ビルマとチベット＝ミチーナ、フォルト・ヘルツ、ナム・タマイ、アドン河谷、ガムラン谷、カカルポ・ラジとたどり、同じルートで戻った。

1938　アッサムヒマラヤ。

1938－39　北部ビルマ＝ミチーナ、タウガウ、イマウ・ブム、ピマウ、パンワ峠、パレ峠とたどって、ミチーナへ戻った。

1946　アッサムのカシ高原。

1948　アッサム、東マニプール。

1949　アッサム、ミスミ高原、カシ高原、ナガ高原。

1950　アッサムとチベット＝サディアからローイト河谷をさかのぼり、ワロンからリマまで行き、戻った。

1963　北部ビルマ＝ミチーナ、スムプラブからキンルムへ行き、戻った。

1956　西中部ビルマ、南部チン高原、マウント・ヴィクトリア。

1956－57　セイロン。

じつは上記のように遠征のあしどりを書き上げても、キングドン・ウォードの業績などわかるものではない。地図にそのルートを書き入れて示さないと読むものにはわかりにくい。ここに北部ビルマ、雲南、チベット、アッサムなどの地図を大きく掲げる余裕がないので、このへんのところはかんべんしていただきたい。キングドン・ウォードがその生涯の大部分をこの辺境地帯、しかも現在においても未知の部分が多い地域の探検踏査に費やしたことを知ってもらえればありがたい。

これらの地域には不思議にもあまり動物の姿がみられない。かれはその著書の中で幾度もそのことを述べている。これらの湿気の多い森林の中での植物のものすごい繁茂ぶりが、動物の生活をダメにしてしまっているかのようにみえる。

「これらの森林にもっとも抑圧的な重苦しいイメージを与えるのは、たぶん、それらにみなぎる途方もない沈黙あるいは静寂であろう。かようにうす暗い、雨の多い荒涼さが動物の生命をおしつぶしてしまい、休息所や食物を提供することが全くないかのように思える。鳥はほとんど稀にしかいないし、ネズミの類以上に大きい動物をみたことがない。リスでさえいないのである。」

これは北部ビルマおよび近辺地域の丘陵地帯の大部分を埋めつくしている森林について、一般的にいえることである。これは南西モンスーンの影響をまともに受けるからであろう。これらの森林はほとんどが濶葉樹から成っていて、庭園家には役立たないものばかりである。シャクナゲやモクレンの類の混合林がみられるのは8,000フィート以上である。さらにそれ以上になれば、それほど大きくないシャクナゲを混えた竹ヤブが拡がり、空地の草原にはサクラソウやケシの花がみられる。

11000フィート以上になると、竹は姿を消しはじめる。それに代って、背の低いシャクナゲの濃いヤブや背丈の伸びない灌木林が占め、高山の草原がひろびろと拡がる。

麗江山脈すなわち雲南の山々とビルマの山々との植生の相違は、前者には殆んどみられない、ぎっしりと生えた、通るのも困難な森林帯と竹ヤブの広大な拡がりが後者にみられるということだ。

ウォードが有名なツァンポ・ゴルジュを探査した1924年の遠征がたぶんもっともよく知られており、また、彼の旅行のうちでもっとも輝しいものであるが、1911年の最初の植物採集旅行もけっして見逃すことのできない、すぐれた業績をあげている。1913年の旅行とともに、メコン川上流、サルウィン川上流のもっとも徹底的な探検であろう。また、巴塘の南、北緯29度～30度の地域を訪れたイギリス人は殆んどそれまでいなかったのである。

しばしば起ったことだが、これら国境地帯ではトラブルの噂がひろまっていた。しかし、ウォードはそうした危険をものかえりみず、す早く旅行し6日間で、アトンツェから巴塘まで180マイルの山地を踏破したのだった。

地理学的見地からいうと、1911年および1913年の旅行は極めて重要である。かれの最初の著書、The Land of the Blue Poppy の中で、メコン川とサルウィーン川上流付近の地域に関する最良の情報を詳細に述べている。雲南のこの地域は地理上、気候上の謎にみちており、いまなお説明がむずかしい地域である。

A.K.バリは、当時樹木や灌木には興味を持っていなかった。かれのウォードへの注文は、高山植物や草木類の採集であった。そのため、植物学的な成果は最大な重要性を持つとはいえない。しかし、この最初の植物さがしをしたおかげで、ウォードは将来もっとみのりのある成果をあげるにはどこへ行けばいいかを知ることができたのであった。かれはすでにフォレスト、ハンデル・マッェッティ、ロックなどによって徹底的に採集された地域を更にさがし廻るつもりは少しもなかった。かれは自分の目をちがった地域に向けた。ビルマ北部、ビルマとアッサムとの間の国境山脈、南東チベット、アッサム、ヒマラヤなどである。その結果、かれの植物学的探検行のすべては、かれ独自のものとなった。これはいままで多くの植物採集者あるいは探検家とは全くちがった、新しい情報をもたらしたのである。花を求めての行動としてもそうであるが、地理学的な未知を求めての行動としても新しかった。

この点で、かれは採集にあたって自分だけの方法を固く守ったのは賢明であった。雲南においては、中国政府の力が支配的であろうとなかろうと中国人あるいは完全に中国の監督下にあった部族は丘陵間の居住地域へ住みついていた。したがって輸送や食料補給はそれほどの遠距離をカバーしなくてよかった。もちろんすぐ間近というわけにはいかなかったが、食料や駄獣の飼料の不足などの不便を感じることなく、かなりの人数で旅行することが可能であった。

ウォードが旅行した広大な地域はそうした状況にはなかった。南東チベットはチベットの他の地域と同様にそれほど住民はいなかった。ビルマ北部では北へ行くにしたがい、状況は更に悪かった。ナム・タマイおよびアドン谷では、何マイルにわたって、行っても行っても樹木の生い茂った地域がつづき、ほとんど完全な非居住地域であった。

連載・ヒマラヤの報告書紹介 ⑩

シシャパンマ 1981年・春 ―日本女子登山隊の記録―

―女子登攀クラブ―

岳人の待望久しかった中国大陸の高峰が開放された。1980年には先陣を切って「もう一つのエベレスト」が登られ、そしてこの年1981年には堰を切ったように高峰にも中峰にも我が日本隊は足跡を残した。残念ながら足跡ばかりでなく体をも残してしまった隊もあった。

「高い!!高い!!」とぼやきながらも今年も、9隊が中国登山を予定している。かってもそうであった。ネパールが、カラコルムが、ガルワールが、ガンゴトリが。全く同じパターンを繰り返す我国のヒマラヤ登山熱。

さて本論である。こうした中でアンナプルナⅢエベレストと高峰登山の実績を持つ女子登攀クラブが二つ目の8,000 m峰として中国のシシャパンマ(8,012 m)を登山した報告書である。

5月末に帰国し9月には約200ページに及ぶ報告書(それも写真の少い、従って文字の多い)を出版できたのであるから、これは先ず賞讃に価いする。特に中国詣を夢見、資料を探している岳人にとっては、これほどありがたいことはない。

広大な中国の中で解放されている地域も東西南北にまたがっているので、全てが参考になる訳にはいかないが、中国登山のおおよその進め方を知ることができる。

渉外・梱包・ヤク・中国での食事・高所協力員等は実践になくてはならない資料であろう。

残念なのは気象の面の報告がないことである。特に開放間もない中国側の山々については、この気象面でのデーター集積と分析が各隊の協力の下に行われることを望みたい。

登山の中味はどうだったのか。隊の行動表をみる限り隊員がルートの先端に出た様子はうかがえない。高所協力員が常にトップに立っているかに思える。個人別行動表をみると、これはもう通常考えられる8,000 m峰の包囲法による登山から見れば目を覆うばかりである。つまりは、隊員が高所登山は実施しようとしたが、ほとんどの隊員は、不調であった、としか思えないのである。かろうじてエベレスト登頂の実績を持つ隊長が登山できた。その隊長でさえ間一髪の登頂であった。

確かに攻めにくい山は存在する。この山もその部類に入るだろう。何よりも5,100 mのベースキャンプまで自動車で入り、5,000 m台でキャンプ2つを必要とする長い(27 Km)氷河を抱えた山なのだ。偵察時にこのことが確認され、それに沿った戦術でのぞんだにも拘わらず隊員がそのローティションをこなせなかったのは、隊員の基本的な体力の問題なのか、ローティションの誤まりだったのか。そして、登頂日を固定した(適確なアドバイスとなっているが)結果によるBC入り後31日目の登頂という登山期間が故に包囲法の最も基本的なアタック前の低地休養なしと云う危険な戦術となったことは残念である。

登りつめて行き、そして高所で「順応のための休養」という全くのセオリーを無視した戦術の根拠は何なのだろうか。

総じて言えば、8,000 m峰を登山するには総合力で劣っていたと言うことであろうか。

何はともあれ、隊長の田部井淳子氏はこの登頂により旧8,000 m峰14座の最高峰(エベレスト)と最低峰(シシャパンマ)の登頂者になるという、珍らしい記録保持者となったのである。

ちなみにこの隊にはHAJ会員の三原洋子氏と釣部恵子氏が参加している。

最後に他人事ながら「女子登攀クラブ」には、隊員の実力相応の山をハイポーターなしで登山してみてはいかがかと思うのは評者の御節介であろうか。 (ク)

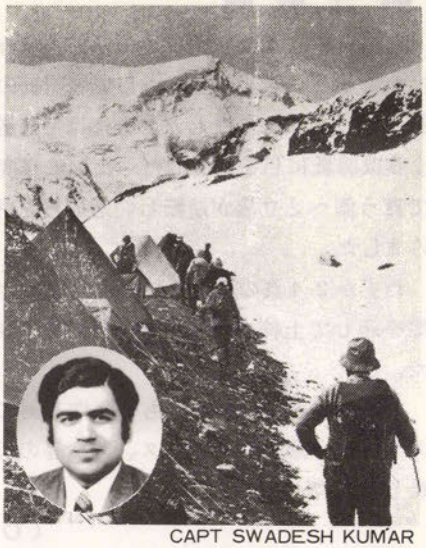
B5版 194頁 1981年9月発行
女子登攀クラブ刊
2,000円

Shikhar Travels

―― シカール・トラベル ――

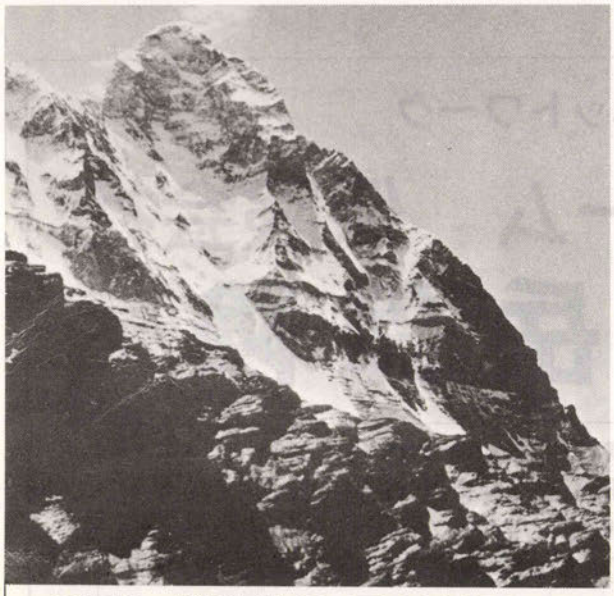
〝魅惑の インド・ヒマラヤ〟

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar TRAVELS PRIVATE LIMITED
1,701, Nirmal towers,
26 barakhamba road new delhi-110001
tel. 42555, 42666 telex 031-4364 SHIK IN Cable SHIKHE
Branch office:Gangtok
Camp office:Joshimath & Uttarkashi



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

★ インド政府許可証
★ 通 関 手 続
★ 交 通 機 関
★ ポ ー タ ー
★ ハイポーター
★ デラックス食料賄い
★ テント宿泊用具
★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.
F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India
Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823
日本代表
ファー イースト エンタープライゼス
東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル ☎407－8100(代表)

■寸感■

角田編集長が公私共多忙のため、どう云う訳けか急遽ピンチヒッターとして機関紙の編集に携わることになりました。今迄は毎月送られてくる機関紙に目を通す側だったのに今度は読んで貰う側へと立場が逆転しいろいろと戸惑い悩みました。

わずか２４頁の機関紙ではありますが編集作業を通じて上梓される迄の苦労が良く判りました。

ひとつ会員の皆さんにも一度作る側になって考えて戴き原稿やニュース、写真等のご協力を賜りたく存じます。

（O.）

事務局日誌（1月）

4日（月）　事務局仕事はじめ

9日（土）～10日（日）　第三回インド・ヒマラヤ会議開催
'82年ヒマラヤ登山学校第一回合宿（於：ＨＡＪルーム）

17日（日）　寺本家葬儀（於：津島、小島、山森、菊地出席）

19日（火）　事務局会議（稲田、山森、菊地、尾形）

24日（日）　埜口家葬儀（於：吹田、小島、山森、菊地出席）

29日（金）　１982年登山学校インストラクター会議（土居、稲垣、今野、角田、尾形）

31日（日）　鈴木家葬儀（於：南陽、小島、稲田、菊地出席）

ヒマラヤ No.124（3月号）

昭和57年2月10日印刷　57年3月1日発行

発行人　柴田金之助

編集人　角田不二

発行所　日本ヒマラヤ協会

〒160　東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル 506 号

全世界のネットワーク

AFIA ホーム　保険会社

海外 山岳保険

※凍傷・ヘリコプターチャーター料等も支払います。
※例　4ヶ月間の場合＝死亡100万円、救援者費用100万円で25,520円です。
※詳細は下記へお問い合わせ下さい。

取扱代理店
郷インシュランス・コンサルタント
〔ホーム保険会社代理店〕
〒100 千代田区丸ノ内3－1－1
国際ビル8F
TEL. 03－281－2981

相談所
ホーム保険会社首都圏支店
〒100 千代田区丸ノ内3－1－1
国際ビル8F
TEL. 03－211－4401
担当：寄木康男(ヨリキヤスオ)

カラコルムセミナートレッキング隊員募集

ＨＡＪではこれまでネパールヒマラヤで五百沢智也講師のもとにセミナートレッキングを実施してきましたが、このたび「この催しをパキスタンでも!!」という要望に応え、下記のような計画を組みました。

コーランの読経と炎熱の砂漠、コバニーの実るオアシスの憩い、そして豪快なカラコルムの氷河をあなたも歩いてみませんか。

実施要項

目　的　西部カラコルムバツーラ山域の踏査及び五百沢智也氏の指導による野外調査活動

時　期　1982年7月26日～8月15日

負担金　43万円（航空運賃の変動等により変ることもあります）

定　員　20名（申込順）

講　師　五百沢智也、他1名

申込み　1982年4月末日までに下記に申込むこと（資料を送ります）

〒160東京都新宿区高田馬場3－23－1
淀橋食糧ビル506　日本ヒマラヤ協会
TEL 03-367-8521

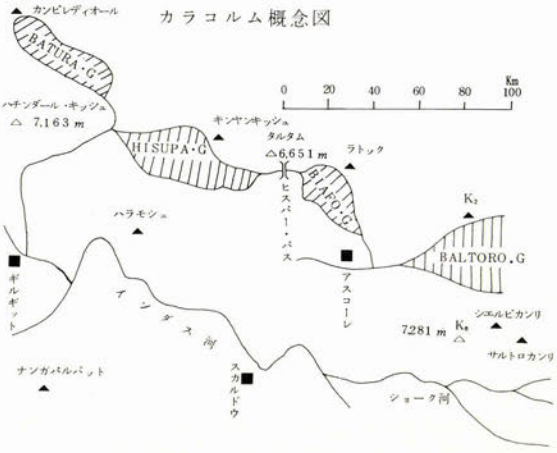
踏査コースと日程

7／26（月）　東京 $\xrightarrow{\text{PIA}}$ イスラマバード
7／27（火）　イスラマバード滞在（山行準備）
7／28（水）　イスラマバード $\xrightarrow{\text{バス}}$ ギルギット
7／29（木）　ギルギット $\xrightarrow{\text{ジープ}}$ バール
7／30（金）　バール→ボラダス谷→シュエー
7／31（土）　シュエー→バルタール氷河→バルタールのカルカにＢ・Ｃ設置
8／1（日）　Ｂ・Ｃにて休養
8／2（月）　バルタール→ＨＡＪ '78 バツーラＢ・Ｃ
8／3（火）　ＨＡＪ'78 Ｂ・Ｃ→バルタール
8／4（水）　バルタール休養
8／5（木）　バルタール→バール

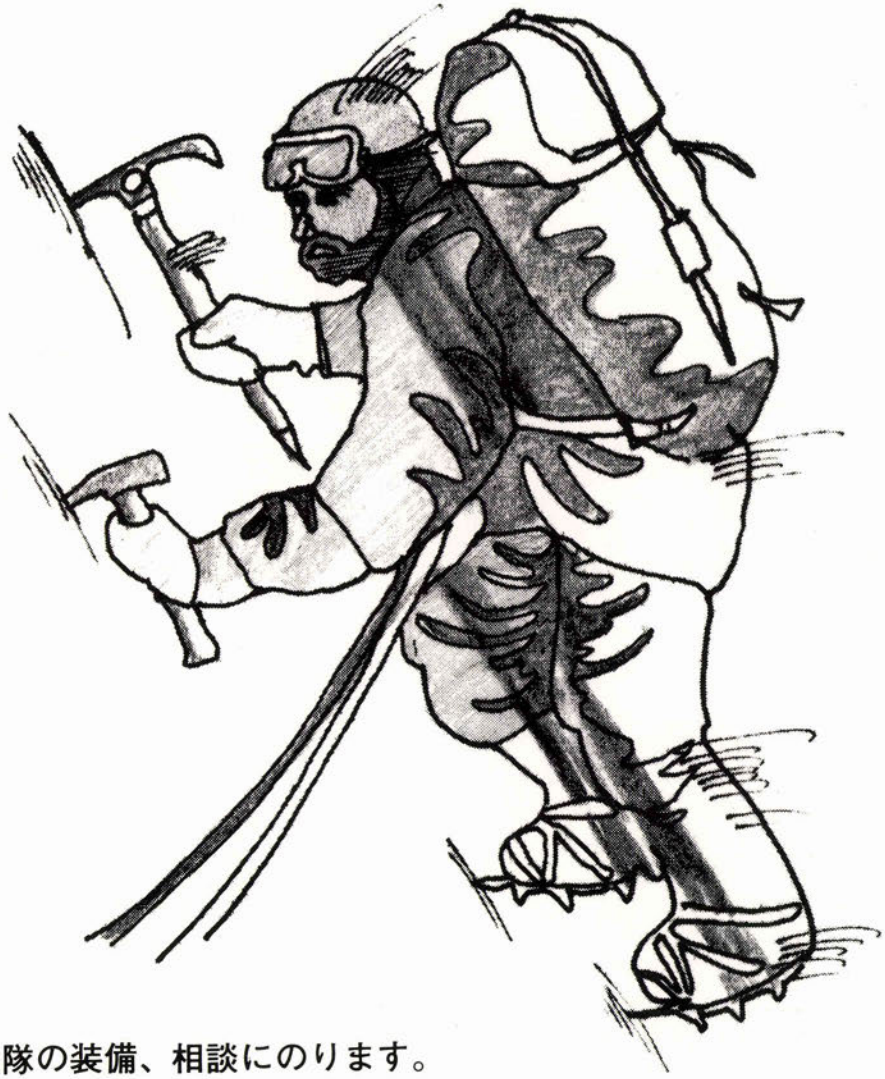
▲バルタール氷河左岸の山々

8／6（金）　バール $\xrightarrow{\text{ジープ}}$ チャルト $\xrightarrow{\text{ジープ}}$ フンザ
8／7（土）　フンザ滞在
8／8（日）　フンザ $\xrightarrow{\text{バス}}$ ギルギット
8／9（月）　ギルギット滞在
8／10（火）　ギルギット滞在
8／11（水）　ギルギット～イスラマバード
8／12（木）　イスラマバード（ラワルピンディ）滞在
8／13（金）　イスラマバード（ラワルピンディ）滞在
8／14（土）　予備日
8／15（日）　イスラマバード $\xrightarrow{\text{PIA}}$ 成田

カラコルム概念図

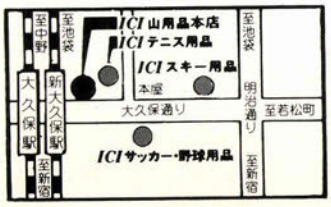


ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。

ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2－2－3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1－16－7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2－8－14☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2－8－6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2－123☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2－19－10東和ビル内☎03(200)7219